

否定的・肯定的育児感情が 母親の養育行動の 生起頻度に与える影響

岡本大輔*・磯部美也子**・

大澤香織***

Effects of Japanese Mother's Negative and Positive Parenting Feelings on Occurrence Frequency of Their Child-rearing Behaviors

Daisuke OKAMOTO*,
Miyako ISOBE** and
Kaori OSAWA***

We examined the effects of mother's negative and positive emotions related to parenting on occurrence frequency of their child-rearing behaviors among 114 mothers of infants. From the results of this study, it was revealed that mothers' feeling of burden on children's manners and behaviors decreases their satisfaction and enjoyment of childcare, their responsive childcare behaviors and increases their controlled childcare behaviors. Limitation of the present study and direction for future research were discussed.

key words: parenting feelings, child-rearing behaviors, Structural Equation Modeling

問題と目的

岡本・大澤・磯部 (2019) は否定的・肯定的育児感情と母親の養育行動パターンとの関連を検討し、母親は子どもの態度・行為に対して負担感を強く感じると、子どもに対する統制的な関わりかけの多い養育行動パターンになりやすいことを示した。しかし、否定的・肯定的育児感情が直接のおよび間接的に養育行動の生起頻度に影響を与えるかは未だ検討されていない。母親が複雑な感情を抱きながら育児を行う中で、

* 児童発達支援・放課後等デイサービス もりのこクラブ Child development support and after-school day service centers for children, Morinoko Club, 1-4-9 Tokiwa-chou, Chuo-ku, Osaka, Takehiro Building No. 104, Osaka 540-0028, Japan

** 奈良大学社会学部,
Faculty of Sociology, Department of Psychology,
Nara University, 1500 Misasagi-chou, Nara, Nara 631-8502, Japan

*** 甲南大学文学部
Department of Human Sciences, Faculty of Letters,
Konan University, 8-9-1 Okamoto, Higashinada-ku,
Kobe, Hyogo 658-8501, Japan

どこをターゲットに介入することが母親の適切な養育行動の生起頻度を高めるかを考える上で、否定的・肯定的育児感情が母親の養育行動の生起頻度に及ぼす影響を明らかにする必要があると考えられる。そこで本研究では、否定的・肯定的育児感情が母親の養育行動の生起頻度にどのように影響を及ぼすかを検討することを目的とする。

方 法

調査対象者 1歳から3歳の子どもをもつ母親114名のうち、回答に漏れがなかった102名 ($M=33.86$ 歳, $SD=3.96$)を以後の分析対象とした。

手続き 2015年10月~2016年3月に、近畿地方で実施された乳幼児健康診査の場で対象者に質問紙を配布した。質問紙の配布の際には、研究目的や回収したデータの処理等に関する説明を行い、研究協力で同意を得た後にその場で回答を得た。調査は無記名で行われた。

調査材料 (1) **養育態度尺度** 母親の養育行動の生起頻度を測定するため、中道・中澤 (2003) の親の養育態度尺度のうち、本研究の対象となる児の言葉の発達をふまえ、2項目を除外した14項目を使用した。2項目を除外した項目の確認的因子分析の結果、「応答性」、「統制」の2因子9項目で構成された。各因子の信頼性係数は「応答性」($\alpha=.81$)、「統制」($\alpha=.76$)であり、十分な内的整合性が示された。各項目は4件法によって評定された。(2) **育児感情尺度** 荒牧 (2008) の育児感情尺度を使用した。否定的育児感情である「育児への束縛による負担感」、「子どもの態度・行為への負担感」、「育て方への不安感」、「育ちへの不安感」、肯定的育児感情である「肯定感」の5因子21項目を使用し、各項目は4件法によって評定された。

分析方法 育児感情尺度と養育態度尺度の得点間の相関関係を相関分析にて確認した上で、否定的・肯定的育児感情が母親の養育行動の生起頻度に及ぼす影響を検討するために分散構造分析 (SEM) を行った。

倫理的配慮 本研究の実施にはその趣旨と倫理的配慮に関して、乳幼児健康診査実施施設に十分説明し、当該施設での調査実施の承諾を得た。

結 果

分析前に、「親の養育態度尺度」と「育児感情尺度」の各下位尺度得点について、児の年齢を要因とする一要因分散分析を行った結果、年齢差が確認されなかったため、データを統合して以後の分析を行った。

育児感情と養育行動の生起頻度との相関関係 育児感情尺度と養育態度尺度の各下位尺度得点間の相関分析を行った結果、育児感情尺度の否定的育児感情の各下位尺度得点間に中程度から強い正の相関が ($r=.45\sim.74$)、「肯定感」と否定的育児感情の各下位尺度得点間に弱から中程度の負の相関 ($r=-.23\sim-.51$) が認められた。育児感情尺度の「子どもの態度・行為への負担感」は、養育態度尺度の「応答性」との間に弱い負の相関が ($r=-.32$)、「統制」との間には弱い正の相関 ($r=.39$) が認められた。育児感情尺度の「育ちへの不安感」は、養育態度尺度の「応答性」との間に弱い負の相関が認められた ($r=-.21$)。また、「肯定感」と「応答性」には弱い正の相関が認められた ($r=.38$)。

育児感情が養育行動の生起頻度に及ぼす影響 育児不安が肯定的な育児感情を上回り、感情の均衡が崩れると、母親は不安状況に陥るとされている (住田, 1999)。相関分析の結果も踏まえると、否定的な感情が強くなれば肯定的な感情は低

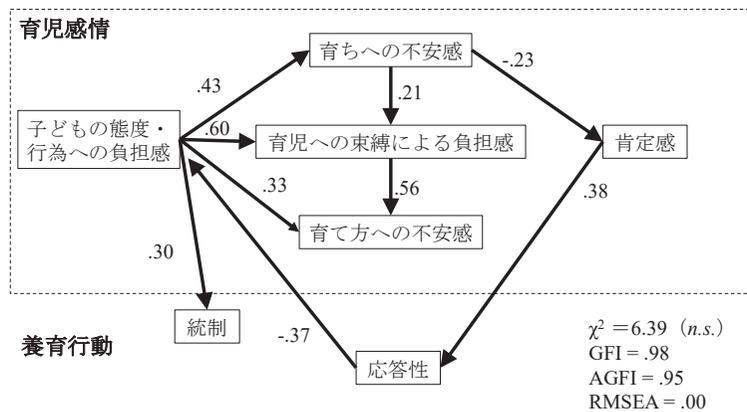


Figure 1 モデル4のSEMの分析結果
(有意でなかったパスは省略した)

下して感情のバランスが崩れ、母親の養育行動の生起頻度に影響が及ぶと考えられる。また、相関分析の結果から、子どもの態度や行為への対応を負担だと感じれば、子どもを統制する養育行動の生起頻度が増加し、子どもの意図を満たそうとする応答性の養育行動の生起頻度は低下することも推測される。そこで、以上の影響関係を反映したモデルを仮定した(モデル1)。加えて、実際の育児は母親の感情や行動と子どもの行動によって連続的に変化することも考えられるため、否定的・肯定的育児感情が養育行動の生起頻度に及ぼす影響関係(モデル1)に加え、育児感情と養育行動の循環も想定したモデルも仮定した(モデル2)。

一方、興石(2005)は、子どもの行動や態度に対して統制が不可能だと感じる事が母親の育児不安を高めると報告しており、子どもの態度や行為への対応ができずに負担に感じると、育児不安を含む否定的育児感情が強まることも推測される。相関分析の結果と包括すると、育ちへの不安が高まれば、母親はその不安から子どもに関わる時間が増えるが、育児に束縛される負担感が強くなり、育て方への不安が高まると推測される。また、相関分析の結果より、子どもの態度や行為への負担感によって強まると考えられる否定的育児感情が、肯定感を低下させることも推測される。そこで、以上の影響関係を反映したモデルを仮定した(モデル3)。さらに、否定的・肯定的育児感情間の影響関係(モデル3)に、育児感情と養育行動の循環も加えて想定したモデルも仮定した(モデル4)。

以上に仮定した4つのモデルにSEMを実施した結果、各モデルの適合度は、モデル1がGFI=.96、AGFI=.88、RMSEA=.07、モデル2がGFI=.93、AGFI=.85、RMSEA=.09であった。また、モデル3がGFI=.97、AGFI=.93、RMSEA=.00、モデル4がGFI=.98、AGFI=.95、RMSEA=.00であった。適合度の値より、モデル4が他のモデルに比べて最も妥当なモデルであることが示された。モデル4のSEMの結果をFigure 1に示した。

考 察

本研究で採択されたモデル(Figure 1)から、「子どもの態度・行為への負担感」が高まることで、「育ちへの不安感」が

高まり、「肯定感」と「応答性」が低減すること、また、「応答性」の低減により「子どもの態度・行為への負担感」、「統制」が高まること示された。したがって、母親は子どもの態度や行動に負担感を抱くと、子どもを統制する行動が生じやすくなるだけでなく、育児に対するやりがいや楽しさ(肯定感)が低下し、子どもの意図を満たそうとする養育行動が生じにくくなって、さらに子どもの態度や行動への負担感が増すことが示唆される。

ただし、本研究で用いた肯定的な育児感情を測定する項目数が否定的な育児感情に比べて少なく、肯定的な育児感情が養育行動に及ぼす影響に関しては今後さらなる検討が望まれる。また、本研究では実施上の限界から1~3歳児を育てる母親のみを対象としたが、今後は0歳児を育てる母親も含めた検討も必要だろう。

このような限界はあるものの、本研究によって、育児感情の否定的側面だけでなく、従来検討されることが少なかった育児感情の肯定的側面も含めて母親の養育行動の生起頻度に及ぼす影響が明らかとなった。また、養育行動の生起頻度から育児感情へと循環して影響を及ぼすことも示唆された。したがって、本研究は母親の複雑な育児感情を考慮しながら、適切な養育行動を促進する方略を考える上で、貴重な一知見になると考えられる。

引用文献

荒牧美佐子 2008 幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化 家庭教育研究所, 30, 139-149.
 中道圭人・中澤 潤 2003 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部紀要, 51, 173-179.
 興石 薫 2005 育児不安の発生機序 日本小児科学会雑誌, 109, 337-345.
 岡本大輔・大澤香織・磯部美也子 2019 否定的・肯定的育児感情と養育行動の関連 日本応用心理学会第86回大会発表論文集, 88.
 住田正樹 1999 母子の育児不安と夫婦関係 子ども社会研究, 5, 3-20.

(受稿: 2019.11.15; 受理: 2020.6.14)